

白山ふるさと文学賞

第七回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

中高校生小説の部 最優秀賞

# 終焉の淵で何思ふ

金沢二水高等学校一年

西にし

彩華さやか

車いすに座り、一人の女性が空を仰ぎ見る。振り返るは、これまでの自分の人生。その日は、八月も終わりにさしかかり、青色の絵の具に灰色を混ぜたような空が、雲の間から顔をのぞかせていた。思い返せば、苦しかったことばかりが頭に浮かんで、たのしかったことは上手く思い出せない。……物心がついた時から、両親の口喧嘩は日常茶飯事で、家族でどこかへでかける、とかそんなことはしなかったように思う。両親は自分に興味がなかったのだ。だからその分、学生時代は勉強に明け暮れ、大学卒業後、ある出版社に就職した。二十代半ばで結婚した男は多額の借金を残して旅立ち、彼と私の間の子供もある日、万引きをする。ゆがんだ家庭環境で育った私には子供を育てる資格などなかったのだろうか。しかし、今となってはどうでもいいことだ。原因は自分の落ち度にあるのかもしれないが、間もなくそれも関係のないことになる。私のひねくれた性格を色で例えるなら、今日の空のように濁った色をしているのだろうか。そんなことを思った瞬間、涼しい風がさあっと吹き付ける。彼女は何気なく、吹き抜けていった方向の反対側を振り返る。そこには、空気に溶け込みそうな、半透明に見える少女がいた。この子、人間じゃない。それだけは確信できた。少女はこちらをじいっと見つめていた。女性は遠くにいる少女に聞こえるように、声を張り上げて問う。

「ねえ、そのあなた。あなたは死神さんかしら」

声をかけられて驚いているような様子の少女は

「私のことが見えるのですか」

彼女は静かにうなずいた。何かを考え込むようにしていた少女はしばらくして、口を開いた。

「そうですね、私は死後の世界の案内人です。……死神、と呼ばれることもあります。美香さん、あなたの担当を任せました、楓といいます」

「そうなんです。じゃあ、私が死んだら、お願いしますね」

にっこりと微笑んで答える美香に驚いた。美香は彼女が今まで見たことのないタイプの人だ。彼女の任務経験が浅いからだろうか。それとも死期をさとした人というのみならず、こんなにもあつさりしているのだろうか。

その夜、楓と名乗る少女は持っていたファイルを開き、月明かりを頼りにして文字を読む。菅原美香。彼女は数年前に足を悪くして以来、車いすで生活している。そのほかは重い病気をわずらってはいないが、彼女自身、安楽死を望んでいる。それは致死量の薬を投与して意図的に自殺を図る行為。この国の法律では積極的安楽死が認められていない、というのも今は昔のこと。五年前に安楽死法が作られてから、この国に住む人々は自ら死を選ぶことが容易になった。そして痛みをとまわらないため、今では安楽死を自身の自殺に使う、というのが一般的な使われ方となっている。そうなるに当然、自殺者は以前より格段に増えてきている。おかげさまで、案内人の仕事も増え続けているのだけれど。はあつ、とため息をひとつつく。分からない。自ら死を選ぶ人の心理が。どうして、自分で選んだ日を人生最後の日と決めることができるのだろうか。それは、残酷な現実から逃げるために、辛い日常を終わらせるために、弱くもろい『人』が選ぶ最終手段なのではないか。

二人が奇妙な出会い方をした翌日の天気は、昨日の曇りをすっかり忘れ去ったように、晴れ晴れと笑っていた。美香は自分で車いすを動かし、その日も病院の中庭に出ていた。

「おはようございます、美香さん。すこし話しませんか。私、車いす押ししますよ」

「ありがとう」

楓がいつもの無表情で声をかけると、美香は昨日と変わらない笑顔でいた。笑っているようで、笑えていない。作り笑い、だろうか。

美香は彼女の空虚な笑みを見たくなくて、とつさに目をそらした。そして、車いすの手押しハンドルに手を置く。

「中央の方に見えるあの、淡い紫の花は何という名前か知っているかしら」

「いいえ」

美香が指さした先を見やり、首を振る。花のひとつひとつは小さいが、今は群生しているため、遠くからでもはつきりと見える。……花なんて、普段あまり気にしたことがなかった。

「あの花はね、アゲラタムって言うらしいの。ここの看護師さんが教えてくれたわ。それでね、きれいだったから、私、凶鑑で調べてみたの。そしたらね、花言葉がね、『安楽』っていう意味だったの。私にぴったりの花言葉を持ってるでしょ」

表情は見えなかったが声色は嬉しそうだった。楓はどう答えたらいいか迷い、まごつきながら疑問に思っていたことを彼女に問う。

「あの、こんなことを尋ねるのはぶしつけかもしれないませんが、死を選ぶことに恐怖はないのですか。後悔はひとつもないのですか」

「まあ、怖くないと言ったら嘘になるかもね。だけどこのまま生きてても、なーんにもないから。……後悔は、忘れちゃった」

それってどういうことですか。楓がそう聞き返す前に、美香は受け持ちの看護師にシャワーの時間です、と呼ばれて病室に戻っていった。またね、といい残して。ひとり残された死神は再びファイルを開く。彼女の過去を知るために。家族にはあまり恵まれなかったようだ。彼女の生い立ちがああ飄々とした性格の彼女を作ったのか。彼女が浮かべる嘘くさい笑顔、そして時折見せる寂しそうな顔。もし後悔などないなら、あんな顔をしたくないだろう。ますます彼女が理解できない。だけど、このままの状態で逝ってほしくはない。そのために私には何ができるだろうか。彼女はタブレットを起動させ、『アゲラタム』と文字を打ち込み、その花を検索した。美香は私にぴったりだ、と言っていたそのときは、なんと縁起の悪い花だろうと思った。しかし、『アゲラタム』にはもう一つの花言葉が書いてあった。それは『信頼』だった。美香と彼女の娘の間にあったはずのものだ。楓の持つデータには、彼女の娘が罪を犯した本当の理由が書かれているが、その理由を美香は知らないのだろう。きっと事件の後も話をしようとしたのかもしれない。最後には二人の中の誤解やわだかまりを取ってお別れをしてほしい。ぐるぐるとそんなことを考えてその日は日が沈んだ。

「美香さん、最後に娘さんにお話をしたいとは思いませんか」

と、楓は思い切って話題を切り出す。それを聞いた彼女は表情を曇ら

せる。

「今更話すことなんてないわよ。あの子だって迷惑に思うだろうし」

「お願いします、お別れを、伝えてあげてください。黙っていなくなる  
と余計、混乱すると思います」

強く、そう伝えた。

「何しに来たの」

彼女の娘はとげのある声で言いながら、向かいの椅子に座った。楓の圧力に押されて結局、あの子に会いに来てしまった。もう二度と会うことはないと思っていたのに。

「まあ、えと、近況の報告に」

にかつと笑って見せる。本当に、笑顔を作るのが下手な人だ。そばで見守る死神はあきたるように息をつく。彼女の姿は美香以外の人には見えていない。部屋には変な空気が漂い、二人はしばらく無言のままだった。先に沈黙を破ったのは娘のほうだった。

「父さんの残した借金は今、どうなってるの」

「え、ああ、そのことなんだけどね、お家を売ったお金と、保険金とかで、なんとかしたから大丈夫よ。安心して、優月が所を出てひとりできりくりできるお金は残してあるから。それとね、母さん、もうすぐ死ぬ予定だから」

「どういうこと、私、本気で心配して。生活が少しでも楽になるように、って。それで、万引きまでして。私を残して死ぬって言うの」

バンつと両手で目の前の机をたたき、一気にまくし立てる。初めて彼女の表情が変わった瞬間だった。

「……優月も安楽死、って言葉は聞いたことがあるでしょう。その方法で死ぬつもりなの。」

そして、言葉を絞り出すように続けて話す。

「万引きした理由、って本当に私のためだったの？」

優月はこくり、と首を縦に振る。

「……そう、そうだったの。これまであなたには何にもしてあげられなくて、その上心配までさせてしまつて。ごめんなさい、母親失格ね」  
そう話す美香の瞳には涙がにじんでいた。

「そんなこと、ない。母さんは、あまり家には帰つてこなかった父さんの分まで私を愛してくれた。母さんの作るごはんは世界一おいしかったし、勉強もたくさん教えてくれた。そのうち、いつか、親孝行をしなくちゃつて思うようになった。……だからつて、人サマのものを盗むなんて最低なこと、しちゃいけないのにな」

美香は相槌を打ちながら彼女の話聞いていた。きれいな静寂が、部屋の中を覆う。

「母さんのことだから、一度決めたら動かないんだろうね」

独り言のようにつぶやく優月に

「うん、そうね。優月、いままでありがとう。あなたが将来ここを出たとき、自分の力で幸せを探しなさい。そして、広い世界をその目で見なさい。無限にある可能性をその手でつかみなさい。どんなことがあつても、強く生きなさい」

と話す美香は、楓が見たことのない顔をしていた。それは、立派な母親の顔だった。

「……わかった。母さんも、天国で元気でね」

優月はそう言つて笑顔をつくる。彼女のそれは母親によく似た面影を残していた。

「そうだ、美香さん。あの紫の花にはもう一つの花言葉があるんですよ。」

『信頼』という言葉の意味するのだそうです。あなたと、優月さんによく合うと思います」

「ふふ、ありがとう」

くすぐつたそうに笑う美香の笑顔には、もう曇りは見られない。それを見て胸のあたりがぼかぼかとあたたくくなる。楓は初めての感覚に戸惑いを覚えた。

美香が薬を飲んで旅立つ日、死神は彼女のもとへ向かつていた。必要な書類を集めていたら遅くなつてしまった。最後にもう一度、彼女と話せるだろうか。病院の入り口から入り、中庭を駆け抜ける。ふと視界に入ったあの花を、彼女に届けようと思つた。二、三輪を摘んで再び病院内を疾走する。たどり着いた先にはベッドに横たわる彼女がいた。

「美香さん、わたしには、りかいできません。せつかく娘さんとも仲直りできたのに、どうして今死んじゃうのですか。あれからあなたは、とても素敵な表情をすることが、おおくになりました。今じゃないとダメなんですか」  
最後のほうは、喉の奥に嗚咽が詰まり上手く言葉を発音することができなかつた。塩辛い雫が自分の目から流れ落ちる。これが涙というものなのか。私は今、泣いているのだろうか。

「ありがとうね。あなたには感謝しているの。最初から、私の心のうちに気付いてくれていたんでしよう、真剣に向き合つてくれて。娘にも、伝えたいことが言えたから、それで十分よ。これで心置きなくあの世へ行けるわ。これ以上の幸せを味わつてしまつたら、ほんとに天国へ行けない気がするもの。それにね、私はもうすでに、一生分苦労しつくしたと思うから。私にとつての『死』とは、休むという意味もあるから。ねえ、死神さん。そろそろ私も休ませてくれないかしら。わがまま言つてごめんなさいね」

「……わかりました」

下唇を噛み、美香の手に摘んできた花を渡す。

「どうぞ、これ。一緒にもつていってください」

「ありがとう」

楓を見上げる彼女ははにかみながら笑つた。それは誰よりも美しくきれいな『はな』だった。そろそろ、薬が効いてきたらしい。彼女の目がゆつくりと閉じてゆく。……彼女の心を少し、理解できた気がする。

「……安らかに、お眠りください。こちらこそ、ありがとうございます。今まで、お疲れさまでした」

病室の窓から入った風が、楓と、美香の魂を連れてゆくのだつた。